



Title	パーリ三蔵における四苦について
Author(s)	名和, 隆乾
Citation	待兼山論叢. 哲学篇. 2023, 57, p. 1-20
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/94899
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

パーリ三蔵における四苦について*

名和 隆乾

§0 はじめに

パーリ三蔵において、苦諦で列挙される苦の内容（生、老など）にはいくつかのパターンがある。これについて、『上座仏教事典』の中で榎本（2016）は下記6パターンを紹介している。

- 1種の苦：五取蘊。
- 6種の苦：生，老，死，悲嘆苦憂悩，求不得苦，五取蘊。
- 7種の苦：生，老，病，死，悲嘆苦憂悩，求不得苦，五取蘊。
- 9種の苦：生，老，病，死，悲嘆苦憂悩，怨憎会苦，愛別離苦，求不得苦，五取蘊。
- 8種の苦（律）：生，老，病，死，怨憎会苦，愛別離苦，求不得苦，五取蘊。
- 8種の苦（アピダンマ）：生，老，死，悲嘆苦憂悩，怨憎会苦，愛別離苦，求不得苦，五取蘊。

上記諸パターンについて、若干の先学¹⁾が新古の問題を論じているが、いずれも確実な根拠を示し得ているとは言い難い。新古の問題に限らず、各パターンの有する教理上の意義なども、確実なことはそれほど分かっていないように思われる。このような問題意識の下、インド仏教における苦の研究の進展に僅かでも寄与すべく、以下を試みる。まず§1では、パーリ三蔵より、苦諦の内容を生、老などと具体的に列挙する用例の一覧を示す。すでに同様の一覧を、森（1995: p. 190-192）が提示している。ただし、同氏の一覧では諸版の異読が考慮されていないようである。そこで本稿では、パーリ三蔵4版（Ee, Be, Se, Ce）およびEeが脚注などで提示する異読をも参照した一覧

を提示し、森氏の一覧に若干ながら補足および修正を加える。その上で、§2では苦諦で苦が列挙される際の(a)piの有無に着目した考察を行う。次いで§3では、苦諦冒頭のいわゆる四苦の位置にいずれの苦が挙げられるかについて、異読状況や、註釈、復註の記述に注意しながら事実関係を整理する。

§1 用例一覧

パーリ三蔵において、苦諦の内容が生、老などと挙げられる箇所を調査すると、下記12例が確認される。便宜上、各例にはex. Xのように番号づけを行った。本稿でこの一覧の例に言及する場合、原則的にこの用例番号を用いる。

ex. 1 Vin (vol. 1, p. 10²); ex. 2 DN 22 (vol. 2, p. 305³); ex. 3 MN 9 (vol. 1, p. 48); ex. 4 MN 10 (vol. 1, p. 62); ex. 5 MN 28 (vol. 1, p. 185); ex. 6 MN 141 (vol. 3, p. 249); ex. 7 SN 56.11 (vol. 5, p. 421); ex. 8 AN 3.61 (vol. 1, pp. 176f.); ex. 9 AN 6.63 (vol. 3, p. 416); ex. 10 Paṭis (vol. 1, p. 37.); ex. 11 Paṭis (vol. 2, p. 147); ex. 12 Vibh (p. 99).

上記12例のうち、ex. 9においてのみ、他11例のような定型的な四諦ではなく、四諦の形式に別要素を加えた教説が見られるが、詳しくは同例を扱う際に説明する。なお本稿では、苦諦の内容として五取蘊のみを挙げる例 (SN 22.104 (vol. 3, p. 158); SN 56.13 (vol. 5, p. 425)), 六内処のみを挙げる例 (SN 56.14 (vol. 5, p. 426)), そして具体的な苦の列挙はなく苦の性質 (「压迫の意味 (pīḷana-’tttha-)」など) が説明される例 (Paṭis vol. 2, p. 104) の計4例については扱わないものとする。

本稿末には別表を付し、上記12例の苦諦原文と、4版およびEeが脚注などで示す異読を提示した。この表では参考までに、Vismにおける苦諦 (p. 498) の原文も掲載している。以下、ex. 2を例に表の見方を説明する。同例を表で見ると、左の列から苦諦の原文が順に並んでいる。このうち、四苦の欄にある註[1]に対し、同欄の原文直後に註内容として「備考欄参照」とある。これは表右端の備考欄の参照を促している。次いで怨憎会苦の欄にある「Ee,

Ce: 欠」とは、両版がこの苦を欠くことを意味する。ただし註[2]を見ると、異読が存在することが分かる。次いで五蘊盛苦の原文には註[3]として「Ce: add. pi」とある。これは註[3]の位置に、4版のうちCeのみがpiを加えることを表す。表の見方は以上である。

§2 苦諦における苦の列挙と(a) piの有無について

本節では、苦諦において苦が列挙される際の(a) piの有無に注目した考察を行う。別表の通り、全例を通じて、四苦、怨憎会苦、愛別離苦、求不得苦、五蘊盛苦の原文は、piの有無を除けば常に同一である。また全例で常に四苦、求不得苦、五蘊盛苦は現れるが、怨憎会苦と愛別離苦とについては出入りがある。ただし両苦は常にセットで出入りし、どちらかのみが現われることはない。

各苦におけるpiの有無に注目すると、四苦の位置に列挙される苦の全てと、求不得苦とは常にpiを伴う。これに対し、怨憎会苦、愛別離苦、五蘊盛苦については版によってpiの有無が異なる。すなわちまず怨憎会苦、愛別離苦について、この両苦は、Be, Seでのみ挙げられる場合も含めて9例(ex. 1-4, 7-8, 10-12)で挙げられる。このうち両苦にpiを持つのは、Be, Seのみが両苦を含むex. 2-4であり、Seのみが両苦を含むex. 8と、4版が共通して両苦を含むex. 1, 7, 10-12ではpiは現れない⁴⁾。

両苦の有無と、両苦がpiを含むか否かにより、四苦から求不得苦までのグループ分けが相違することになる。すなわちまず両苦が現われ、かつpiが含まれる場合、四苦ないし求不得苦までの7つの苦の全てがpiで並列されていることになる。一方で両苦にpiが含まれない場合、四苦の並列で1グループを成し(A pi B pi C pi D pi)、次いで四苦とは別グループとして怨憎会苦、愛別離苦、求不得苦の三苦が並列されていることになる(A B C pi)。そしてそもそも両苦が含まれない例では、四苦の全ての語と求不得苦とで常にpiが含まれるため、四苦および求不得苦の五苦が並列されていることになる。

次に五蘊盛苦について、ex. 1, 2, 7, 10, 11, 12の6例において、°kkhandhāの語の直後に、EeまたはCeがpiを伴う場合がある。しかし五蘊盛苦は、原文によれば生苦から求不得苦までの略説 (samkhitta-) であるから、piを含まず、他の苦と並列でない独立した1項目として読む方が好ましい。

なお、上座部大寺派以外の初転法輪記事のうち、梵文が現存する文献から苦諦におけるapiの有無を確認すると、苦諦の内容としては北伝で一般的な八苦（生，老，病，死，怨憎会苦，愛別離苦，求不得苦，五蘊盛苦）が挙げられ、apiを求不得苦にのみ置く系統と、五蘊盛苦を除く全てに置く系統とが見出される⁵⁾。両系統でapiの置き方は異なるが、どちらも五蘊盛苦にapiを置かず独立させている。

§3 四苦について

次いで本節では、苦諦冒頭の四苦の位置に、生などのうちいずれの苦が挙げられるかを考察する。これについては別表より、次の3パターンが確認される。ここでは、異読でのみ挙げられる苦も含めている点に注意されたい。異読を採用すべきか否かについては後述する。

- 生，老，病，死（2例：ex. 1, 11）。
- 生，老，死，悲嘆苦憂悩（4例：ex. 4, 5, 10, 12）。
- 生，老，病，死，悲嘆苦憂悩（6例：ex. 2, 3, 6, 7, 8, 9）。

以下、各パターンについて考察する。まず、上記第1パターン（生，老，病，死）として挙げた2例は、どちらもGotama仏の初転法輪記事である。このほか、第3パターンに含まれるex. 7も同じくGotama仏の初転法輪記事であるが、本例ではEeのみが、生，老，病，死に悲嘆苦憂悩を加えた読みを示す。ただしEeの脚注（別表、ex. 7の備考欄、註[2]）を見ると、“S¹⁻³ B² omit soka°”とある。つまり校訂者が利用した5本の写本（SN vol. 1, p. xii; vol. 5, p. VII）のうち1本（B¹）のみが悲嘆苦憂悩を加える。ex. 1, 11を鑑みるに、ex. 7におけるEeの読みは註記に留め、ex. 7を第1パターンに含めるのが無難であ

る。この問題と関連して、ex. 1の四諦について、註釈（Sp vol. 5, p. 965）は説明を欠くが、復註の1つであり、12Cにスリランカで作成された（青野2020: pp. 45f.）とされる *Sāratthadīpanīṭikā* [Sp-ṭ] に以下の説明が見られる。

Sp-ṭ (Be, vol. 3, p. 174)

byādhi pi dukkho ti idaṃ padaṃ vibhaṅge dukkhasaccaniddesapāliyaṃ na āga-
taṃ. ten' eva Visuddhimagge pi dukkhasaccaniddese taṃ na uddhaṭaṃ, Dham-
macakkapavattana-suttantapāliyaṃ yeva pana upalabbhati ... (執筆者による中
略) ... sokaparidevadukkhadomanass'-upāyāsā pi dukkhā ti vibhaṅge dukkha-
saccaniddese āgataṃ, idha pana taṃ n' atthi.

byādhi pi dukkho というこの文言は、*Vibhaṅga* 中の *Dukkhasaccaniddesa* と
いう聖典では伝承されていない。まさしくそのことにより、*Visuddhimagga*
でも *Dukkhasaccaniddesa* ではそれ (*byādhi pi dukkho* という文言) は引用
されていない。一方、他ならぬ *Dhammacakkapavattana* 経という聖典
(ex. 7のこと) では [*byādhi pi dukkho* という文言が] 認められる… (中
略) …*sokaparidevadukkhadomanass'-upāyāsā pi dukkhā* という [文言は、]
Vibhaṅga 中の *Dukkhasaccaniddesa* では伝承されているが、ここではそれ
が存在しない。

上記によれば、ex. 1, 7では四苦の位置に生、老、病、死が挙げられる。
また ex. 1には、*Vibh* の *Dukkhasaccaniddesa* (ex. 12) に現れる悲嘆苦憂悩が
含まれないという。しかし残念ながら、ex. 7の悲嘆苦憂悩の有無への言及
は見られない⁶⁾。また ex. 11については、Sp-ṭ の上記引用箇所前後を参照して
も言及自体が見られない。

次に第2パターン (生、老、死、悲嘆苦憂悩) について、これを有する
4例 (ex. 4, 5, 10, 12) のうち、ex. 5, 10, 12では4版で異読なしにこのパター
ンが挙げられ⁷⁾ ex. 4ではBe, Seでのみ挙げられる。ex. 4 (経名: Ee, Ce, Se:
Satipatṭhāna; Be: *Mahāsati*⁸⁾) は、ex. 2 (経名は4版全てで *Mahāsati**patṭhāna*) と同
じく四念処を解説する経で、両者の大きな相違は、先学⁸⁾ によれば、後者で
は四諦がその定義文と共に詳説されるのに対し、前者では四諦が簡潔に “*idaṃ*

dukkhan” ti yathābhūtaṃ pajānāti, “ayaṃ dukkhasamudayo” yathābhūtaṃ pajānāti (MN vol. 1, p. 62) などと短く述べられるに留まる点にあるという。先学の指摘は Ee, Ce に関しては正しいが, Be, Se では ex. 2 と同じ四諦の詳説が含まれる。ex. 4 の経名が, 4 版のうち Be のみで Mahāsatipatṭhāna である理由は, ex. 2 と同じ四諦の詳説が含まれる点に由来すると考えられる。なお ex. 2 に対する註釈冒頭では, ex. 2 と同じ場所で説かれた経の名が列挙される。その中で, ex. 2, 4 の経名が次のように言及されている: *evaṃ me sutan ti Mahāsatipatṭhānasuttam ... Majjhimanikāye Satipatṭhānaṃ* (Sv vol. 3, pp. 741f.; so Ee, Be, Se. Ce のみ未見). ex. 4 に対する註釈でも, ex. 2 の経名が言及される: *Dīghanikāyamhi ... Mahāsatipatṭhāne* (Ps vol. 1, p. 278; so Ee, Be, Se. Ce のみ未見). このように註釈では, ex. 2 には Mahāsatipatṭhāna, ex. 4 には Satipatṭhāna との経名が用いられている。以上から考えて, ex. 4 における Be, Se の四諦の詳説は二次的な挿入の可能性がある。なお ex. 4 の註釈は, 四諦の詳細を Vism に譲っている⁹⁾。

次に第3パターン(生, 老, 病, 死, 悲嘆苦憂悩)を有する6例(ex. 2, 3, 6, 7, 8, 9)について, このうち ex. 7 に関しては第1パターンを考察した際にすでに言及を終えた。残り5例について, このうち ex. 9 のみが4版一致して第3パターンを有し, 他の4例(ex. 2, 3, 6, 8)では Ee, Ce が病を含む場合がある。以下, まず ex. 9 について考察し, 次いで4例を扱う。

ex. 9 について, 本稿冒頭で提示した全12例のうち, 本例を除く全ての例が定型的な四諦の形式を有する。すなわち dukkha-, dukkhasamudaya-, dukkhanirodha-, dukkhanirodhagāminī- paṭipadā- の4語が挙げられた後(各語の直後に ariyasacca- なる語が続く場合もある), その内容として, たとえば苦諦では生, 老などが挙げられる。これに対し, ex. 9 の記述は次の通り。

ex. 9 AN 6.63 (vol. 3, p. 416)

dukkhaṃ bhikkhave veditabbaṃ. dukkhassa nidānasambhavo veditabbo. dukkhassa vemattatā veditabbā. dukkhassa vipāko veditabbo. dukkhanirodho veditabbo. dukkhanirodhagāminī paṭipadā veditabbā.

比丘たちよ、苦が知られるべきである。苦の生成因 (nidānasambhava¹⁰⁾) が知られるべきである。苦の違いが知られるべきである。苦の報いが知られるべきである。苦の抑え込みが知られるべきである。苦の抑え込みへ赴く実践道が知られるべきである。

上記の後、別表に挙げた苦の内容が挙げられる。ここでは明らかに四諦のような形式が用いられているが、第二諦の位置に dukkhasamudaya- の語はなく、典型的な四諦にはない nidānasabhava-, vemattatā-, vipāka- の3要素が入っている。この3語のうち nidānasambhava- なる語は、パーリ三蔵では本例のほか、AN 10.174 (vol. 5, p. 262) にのみ確認される。¹¹⁾このように、ex. 9では典型的な四諦が説かれている訳ではない。また ex. 9 に対する註釈および復註では、Vism に説明を譲る記述は見られない。

次いで、残る4例 (ex. 2, 3, 6, 8) について考察する。まず ex. 2 について、Ee のみが “[vyādhī pi dukkhā]” と括弧つきで本文に採用し、これに対する註記 (別表, ex. 2 に対する備考欄の [1] 参照) において、校訂者 (T. W. Rhys Davids と J. Estlin Carpenter) は一部の写本に病苦が含まれることを報告している。しかし同註が指摘する通り、ex. 2 では苦諦の内容が挙げられた直後、生などの各苦の定義文 (DN vol. 2, pp. 305-307) が続くが、ここには病苦が現れない。したがって苦諦冒頭の四苦の位置でも、病苦が含まれない方が文脈の一貫性が保たれる。校訂者も先の註において、病苦は誤って (“by mistaken”) 挿入されたと判断している。なお、ex. 2 に対する註釈は四諦について、ex. 4 に対する註釈と同様の説明 (註9 参照) を述べた後、次のように述べる。「立派な者に属する残りの真実たちに関する議論は、誕生などの語の分析に関する議論を除いて、*Visuddhimagga* でまさしく詳説されている (avasesā ariyasaccakathā t̥hāpetvā jātiādīnaṃ padabhājanakathaṃ Visuddhimagge vitthāritā yeva. Sv vol. 3, p. 797)」。この直後から、註釈は生苦などを説明していく。この説明の中でも、また Vism における四諦の章でも病への言及は見られず、老の説明直後に死の説明が続く。この点でも、ex. 2 では病を含まない読みが適切と考えられる。ちなみに Vism は、四諦の章に限らず、そもそも病に

対する定義文を持たない。

次に ex. 3 について、Ee, Ce が本文に *vyādhi pi dukkhā* を含む。これについて、Ee の校訂者 (V. Trenckner) は、ex. 3 を含む巻の末尾にある註記 (別表, ex. 4 に対する備考欄の註[1]参照) において、校訂で使用された写本 2 本のうち 1 本が “*byādhi pi dukkhā*” を欠くことを報告している。なお ex. 3 に対する註釈は、四諦の詳細を *Vism* に譲る¹²⁾ が、先述の通り、*Vism* は病に対する定義文を欠く。つまり Ee, Ce の読みを採用した場合、ex. 3 本文と註釈が説明を譲る *Vism* とのそれぞれが挙げる苦の内容が一致しないことになる。しかし、註釈が苦の内容説明を *Vism* に譲っているのではないとすれば、不一致は問題とならない。

なお先の Trenckner 註によれば、ex. 3 のほか、ex. 5 (Trenckner 註でいう “at p. 185, l. 4”) では写本 2 本で、ex. 6 (同 “at sutta 141”) では写本 1 本で、そして ex. 2 (同 “DN. 22”) では病苦が欠けている (校訂者はこの欠を “according to Burmese authority” と述べている)。そして、ex. 1, 7 では病苦が含まれるという。

次に ex. 6 について、本例でも ex. 2 と同じく各苦の定義文が含まれる。実はこの ex. 6 の 4 版全てにおいて、苦諦冒頭でも、各苦の定義文でも病は含まれず、生、老、死、悲嘆苦憂悩が挙げられ、ex. 6 の校訂者 (R. Chalmers) も特に何も註記していない。しかし先の Trenckner 註によれば、ex. 6 では一部の写本で苦諦冒頭に病が含まれるという。ゆえに本稿でも一応 ex. 6 を第 3 パターンに含め、本文に病を採用すべきか否かを検討している。しかし、ex. 2 と同様、ex. 6 でも各苦の定義文が並ぶ中に病への言及は存在しない。したがって病苦を含まない読みが好ましく、結果的に ex. 6 の校訂者の判断は支持される。

次に ex. 8 について、Ee, Ce が本文に *vyādhi pi dukkhā* を含む。本例に対する註釈は、「*ariyasaccāni* とは、立派な者たちを作る [真実たち]、あるいは立派な者たちによって通暁されている真実たちである。ここでのこれは略説である。一方でこの文言は、*Visuddhimagga* で詳細に明らかにされている

(*ariyasaccānī ti ariyabhāvakarāṇi, ariyapaṭividdhāni vā saccāni. ayam ettha saṅkhepo. vitthārato pan' etaṃ padaṃ Visuddhimagge pakāsitaṃ. Mp vol. 2, p. 281*)」と述べ、四諦の詳細をVismに譲っている。ex. 8本文にEe, Ceの病を加える読みを採用した場合、先のex. 3と同様、註釈が説明を譲るVismと病の有無の点で不一致が生じるが、註釈がVismに苦の内容説明を譲っていないとすれば不一致は問題とならない。

以上、第3パターンを有する5例について考察を行った。まとめると、ex. 9でのみ、4版全てがこのパターンを本文に有する。しかしex. 9では定型的な四諦ではなく、そのヴァリエーションと看做すべき教説が述べられる。一方、残り4例(ex. 2, 3, 6, 8)のうち、ex. 2, 6については病苦の読みを本文に含めず、註記に留めるのが適切である。ex. 3, 8についてはEe, Ceが生, 老, 病, 死, 悲嘆苦憂悩を挙げるが、両例の註釈は四諦の詳細を、生, 老, 死, 悲嘆苦憂悩のみを解説するVismに譲っている。同様の不一致については、註6)をも参照されたい。

なお、ここで検討した5例(ex. 2, 3, 6, 8, 9)それぞれに対する現存パレルの苦諦の内容は全て、北伝で一般的な八苦であり、四苦の位置では生, 老, 病, 死のみが挙げられる¹³⁾。ただし北伝の中には、四苦の位置で生, 老, 病, 死, 悲嘆苦憂悩を挙げる例も存在する(森 1995: p. 191)。

以上、第1～3パターンについて考察を行ったが、第3パターンの五苦の読みは二次的な印象を否めない。最後に、パーリ三蔵に病も悲嘆苦憂悩も含む五苦の読みが存在する理由について少し付言しておく。ex. 2のEe校訂者は、同例に五苦の読みが存在する理由について、初転法輪記事の影響と推測している(別表, ex. 2に対する備考欄の註[1]参照)。これに加え、次の点を指摘しておきたい。すなわち、第3パターンつまり五苦の例として検討したex. 2, 6にはどちらも、以下に引用する通り、求不得苦の定義文が存在する。この定義文では4版で一貫して五苦が挙げられている。この点も、五苦を挙げる読みの発生に影響を与えた可能性がある。

ex. 2 (DN 22: vol. 2, p. 307) = ex. 6 (MN 141: vol. 3, p. 250)

katamañ ca bhikkhave “yam p’ icchaṃ na labhati tam pi dukkhaṃ?” jātidhammānaṃ bhikkhave sattānaṃ evaṃ icchā uppajjati. “aho vata mayaṃ na jātidhammā assāma, na ca vata no jāti āgaccheyyā” ti. na kho pan’ etaṃ icchāya pattabbaṃ, idam pi “yam p’ icchaṃ na labhati tam pi dukkhaṃ.”

また比丘たちよ、「求めて得られないことも苦しい」とはいずれか？比丘たちよ、誕生を定めとする存在者たちに、次のように望みが生じる。「ああ、我々は誕生を定めとしていなければよいのに。そして、ああ、我々に誕生が到来しなければよいのに」と。しかし知っての通り、比丘たちよ、このことを望んでも達せられ得ない。これも、「求めて得られないことも苦しい」である。

上記に続けて、生を老、病、死、悲嘆苦憂悩に替えた同文が繰り返される。これと同じ定義文は、Paṭis (vol. 1, p. 39) および Vibh (p. 101) のそれぞれ苦諦を解説する中に現れる。Vism (p. 505) でも同定義文が引用され、解説が加えられる。

以上、苦諦における生などのいわゆる四苦に関する異読について、事実関係の整理を行った。怨憎会苦、愛別離苦についても複雑な異読状況が存在し、その事実関係を整理する必要があるが、すでに紙幅が尽きているため、別稿に譲る。

小結

本稿では主に、次の2点を報告した。第一に、パーリ三蔵より、苦諦の内容が挙げられる例の一覧を、4版およびEeが提示する異読情報をも含めて提示した。第二に、同一覧に基づき、四苦について次のような事実関係の整理を行った。

すなわちパーリ三蔵では、苦諦の四苦の位置で、4版が一致して生、老、病、死を挙げる例は、Gotama 仏による初転法輪記事である ex. 1, 11 の2例である。ex. 7 も同じ初転法輪記事であるが、四苦の位置で、Eeのみが生、老、病、死、

悲嘆苦憂悩を挙げる。ただしこの読みを支持するのは、Eeの校訂で用いられた全5写本のうちの1本のみである。ex. 1, 11に合わせて、ex. 7におけるEeの読みは註記に留めるのが無難である。

次にex. 2, 5, 6, 10, 12では、生、老、死、悲嘆苦憂悩が挙げられる。ex. 2, 6に存在する病を含む五苦の異読は、各苦に対する定義文の中に、病に対するそれを欠くことから、註記に留めるのが適切である。ex. 4ではBe, Seが、ex. 2と全く同じく生、老、死、悲嘆苦憂悩を挙げ、四諦を詳説する。しかし、このex. 4の読みは二次的な挿入の可能性がある。

最後に、生、老、病、死、悲嘆苦憂悩を挙げる例について、唯一ex. 9においてのみ、4版が一致してこの五苦を挙げる。ただし本例で説かれるのは、四諦のヴァリエーションと看做される教説である。ex. 3, 8ではEe, Ceで同苦が挙げられる。この読みを採用した場合、ex. 3, 8の註釈はVismに四諦の詳細を譲るが、Vismは四諦の章で病苦を持たないため、Ee, Ceの読みと、註釈が説明を譲るVismとで苦の内容が一致しないことになる。

全体として、Be, Seの読みは上座部大寺派の伝統に一致する傾向がある。苦諦の内容を全てBe, Seの読みに従った場合、初転法輪記事を有するex. 1, 7, 11で生、老、病、死が、ex. 9を除く全例で生、老、死、悲嘆苦憂悩が、ex. 9でのみ生、老、病、死、悲嘆苦憂悩が説かれていることになり、一貫した構成が得られる。ちなみに夙に知られる通り、多くの場合にEeとCe, BeとSeの読みが一致している¹⁴⁾。

本稿では、苦諦の内容を形式的に整理したに過ぎない。今後の課題として、苦諦に含まれる苦の1つ1つについて、また各苦が組み合わせられる諸パターンについて、榎本(2009: p. (1))が提案する方法論を参考に包括的な研究が為されねばならない。これを経てはじめて、各苦の組み合わせがいかなる事情で成立したのか、一定程度、明らかになるだろう。

[註]

- * 本稿における略号および記号は、*A Critical Pāli Dictionary* (V. Trenckner et al. (eds.), Copenhagen, 1948ff.) の Epilegomena に従っている。パーリ文献の底本はSNのみビルマ第6結集版(Be)を、他はPali Text Society版(Ee)を用い、扱った全用例についてタイ王室版第2版(Se)、Buddha Jayanti版(Ce)を合わせた計4版を対校したテキストを使用している。なお各版の特徴や電子化の状況について、青野2021a参照。
- 1) 四苦を巡る主な先行研究については平川(1988: pp. 213ff.)参照。四苦の成立史を考える上で、後藤1996(英語版: Gotō 2005)は重要な示唆を与えている。
- 2) 本例はGotama仏による初転法輪記事で、ex. 7, 11とパラレルである。なおex. 1では、四苦の位置で、別表の通り生、老、病、死が挙げられる。ところがこの仏伝冒頭の十二支縁起観察(Vin vol. 1, p. 1)では、生→老死、悲嘆苦憂惱(「X→Y」は「Xという機縁(paccaya-)からYが生じる」を意味する)」が挙げられる。同様にDN 14(Mahāpadāna, vol. 2, pp. 21-31)でも、Vipassinは四門出遊の際、生を因とする老、病、死に遭遇するにも関わらず、出家後の縁起観察では生→老死のみで、病への言及は見られない。
- 3) 本例には各諦の内容に対する定義文が含まれる。ほかにex. 6, 10, 12と、Be, Seのみであるがex. 4にも含まれる。
- 4) Be, Seでのみ怨憎会苦、愛別離苦が含まれるex. 2-4と、Seでのみ両苦が含まれるex. 8において、これらの原文に両苦が本来含まれていたかについては検討の余地が残る。つまり、ex. 2-4でのみ両苦がpiを持つ読みは、二次的である可能性がある。
- 5) apiが、八苦のうち求不得苦にのみ置かれる例: *Saṅghabhedavastu* (ed. Gnoli, vol. 1, p. 137); *Mahāvastu* (ed. Senart, vol. 3, p. 332)。仏伝ではないが、*Nidānasamyukta* (eds. Chung & Fukita, § 23.13 β)や*Arthavinīścayasūtra* (ed. Samtani, pp. 14f.)でも求不得苦にのみapiが、*Śrāvakabhūmi* (大正大学版, p. 118)ではcaが置かれている; 五蘊盛苦を除く全てにapiが置かれる例: *Lalitavistara* (外蘭版, 下巻, p. 414)。
- 6) ex. 7に対する註釈では、「真実についての議論も、他ならぬ全ての在り方についてVismで詳論されている(saccakathā pi sabbākāren' eva Visuddhimagge vitthāritā. Spk vol. 3, p. 297)」と述べられている。ただしVismの四諦解説では生、老、死、悲嘆苦憂惱が挙げられ病を含まないから、4版全てで病を含むex. 7と苦の内容が一致しない。註釈が生などの解説をVismに譲ることを意図していないなら、不一致は問題とならない。
- 7) ex. 5に対する註釈は、次の通り、四諦の詳細をVismに譲っている: 「dukkhe

ariyasacce などという、他ならぬ摘要の語句たちについてと、*jāti pi dukkhā*などの説明文たちについて語られるべきこととに関しては、*Visuddhimagga*でまさしく語られている（“*dukkhe ariyasacce*” *ti ādīsu uddesapadesu c’ eva jāti pi dukkhā ti ādīsu niddesapadesu ca yaṃ vattabbaṃ, taṃ Visuddhimagge vuttam eva. Ps vol. 2, p. 219*）。

- 8) Gethin 2001: p. 44; 片山 1997: p. 20; cf. also p. 164, n.1.
- 9) 以下の引用文末尾（下線部）で *Vism* に説明が譲られている。「*idaṃ dukkhaṃ ti yathābhūtaṃ pajānāti* とは、渴望を除く三界の諸事物を、「これは苦である」と、本性通りに理解する。一方で知っての通り、他ならぬその苦を生じさせる、出現させる以前からの渴望（cf. *Sv-ṭ vol. 2, p. 127: purimataṇhaṃ ti purimabhavasiddhaṃ taṇhaṃ*）を「これが苦の出現である」と〔理解する〕。両者の活動しない涅槃を「これが苦の抑え込みである」と〔理解する〕。苦を知り尽くし、出現を打ち捨て、抑え込みを目の当たりにさせる、立派な者たちに属する道を、「これが苦の抑え込みへと赴く実践道である」と本性通りに理解する、という意味である。残りの立派な人に属する真実に関する議論は、*Visuddhimagga* で詳論されている通りである。（“*idaṃ dukkhaṃ ti yathābhūtaṃ pajānāti*” *ti thapetvā taṇhaṃ tebhūmake dhamme* “*idaṃ dukkhaṃ*” *ti yathāsabhāvato pajānāti. tass’ eva kho pana dukkhassa janikaṃ samutthāpikaṃ purimataṇhaṃ “ayaṃ dukkhasamudayo” ti. ubhinnaṃ appavattim nibbānaṃ “ayaṃ dukkhanirodho” ti. dukkha-parijānaṃ samudaya-pajahaṇaṃ nirodhasacchikaraṇaṃ ariyamaggaṃ “ayaṃ dukkhanirodhagāminī paṭipadā” ti yathāsabhāvato pajānāti ti attho. avasesā ariyasaccakathā Visuddhimagge vitthāritā yeva. Ps vol. 1, p. 300. 下線部は執筆者による）。*
- 10) *nidānaṃ eva sambhavo nidānasambhavo* (*Mp vol. 3, p. 406*). 「まさしく原因である生成が *nidānasambhava-* である」。
- 11) *lobho kammanidānasambhavo, doso kammanidānasambhavo, moho kammanidāna-sambhavo* (*AN 10.174 (vol. 5, p. 262)*). 「貪欲は業の生成因である。怒りは業の生成因である。蒙昧は業の生成因である」。
- 12) 「ところでこの箇所の略説について、*dukkhañ ca pajānāti* における *dukkhaṃ* とは、苦という真実である。一方で詳説の中で語られるべきことの全ては、*Visuddhimagga* でまさしく語られている（*imassa pana vārassa saṅkhepadesanāyaṃ dukkhañ ca pajānāti* *ti ettha dukkhaṃ ti dukkhasaccaṃ. vitthāredesaṇāyaṃ pana yaṃ vattabbaṃ siyā, taṃ sabbhaṃ Visuddhimagge saccaṇiddeṣe vuttam evā* *ti. Ps vol. 1, p. 215. 下線部は執筆者による）。*
- 13) 今回確認した4例に対するパラレルは以下である。ex. 2: 『中阿含経』（以下、*MĀc*）第31経（『大正新脩大藏経』（以下、*T*）vol. 1, p. 467b27-29）；ex. 3: *MĀc 29* (*T vol. 1, p. 462a27-29*)；『雑阿含経』（以下、*SĀc*）第344経 (*T vol. 2, p. 95a1-4*) ex. 6:

MĀc 31 (T vol. 1, p. 467b27-29) ; 『仏説四諦経』 (T vol. 1, p. 814c6-8) ; 『増一阿含経』 (T vol. 2, p. 643b17-20) ; ex. 8: MĀc 13 (vol. 1, p. 435c26-29) ; ex. 9: MĀc 111 (T vol. 1, p. 600b8-9) ; 『漏分布経』 (T no. 72, vol. 1, p. 853b19-22).

- ¹⁴⁾ 近年, Be の編纂の目的や指針に関する研究が進められている。これについて, 青野 2021b および同論文で挙げられている二次文献参照。

[一次文献]

Arthaviniścayasūtra: Samtani, N. H. *The Arthaviniścaya-Sūtra & Its Commentary (Nibandhana)*. Patna: K. P. Jayaswal Research Institute. 1971.

Lalitavistara: 外蘭幸一『ラリタヴィスタラの研究』, 大東出版社, 上巻: 1994; 中～下巻: 2019.

Mahāvastu: É Senart (ed.). *Mahāvastu*. 3 vols. Paris. 1882-1897.

Nidānaśaṃyukta: Chung, Jin-il & Takamichi Fukita (eds.). *A New Edition of the First 25 Sūtras of the Nidānaśaṃyukta*: 梵文 雜阿含 因縁相應 (第一～二十五経). Tokyo: 山喜房佛書林. 2020.

Saṅghabhedavastu: Gnoli, Raniero (ed.). *The Gilgit Manuscript of the Saṅghabhedavastu: Being the 17th and Last Section of the Vinaya of the Mūlasarvāstivādin*. Rome: Is. M. E. O., 1977 (pt. 1), 1978 (pt. 2).

Śrāvakabhūmi: 大正大学総合佛教研究所声聞地研究会『瑜伽論声聞地第二瑜伽書』, 山喜房佛書林, 2007.

二次文献

青野 2020: 青野道彦『パーリ仏教戒律文献における懲罰儀礼の研究』, 山喜房佛書林。

青野 2021a: 青野道彦「上座部仏教文献研究におけるデジタル化の問題点: コンコーダンスとデジタルテキストに注目して」『人文情報学月報』110. (URL: <https://www.dhii.jp/DHM/dhm110>. 最終閲覧日: 2023年9月7日)

青野 2021b: 青野道彦「ビルマ第六結集版に関する予備的調査——律蔵を中心に脱——」『仏教学』62, pp. 1-24.

榎本 2009: 榎本文雄「〔四聖諦〕の原意とインド仏教における「聖」」『印度哲学仏教学』24, pp. (1)-(19).

榎本 2016: 榎本文雄「四諦」『上座仏教事典』, 上座仏教事典委員会 (編), めこん, pp. 64-65.

片山 1997: 片山一良『中部 (マッジマニカーヤ) 根本五十経篇 I』(パーリ仏典〈第 1

期) I), 大蔵出版。

後藤 1996: 後藤敏文「Yājñavalkyaのアートマンの形容語とBuddhaの四苦」『印度學佛教學研究』44, 2: pp. 887-879.

平川 1988: 平川彰『法と縁起』, 平川彰著作集第1巻, 春秋社。

森 1995: 森章司『原始仏教から阿毘達磨への仏教教理の研究』, 東京堂出版。

Gethin 2001: Gethin, Rupert. *The Buddhist Path to Awakening*. Oxford: Oneworld Publications. 2nd. ed.

Gotō 2005: Gotō, Toshifumi. "Yājñavalkya's Characterization of the Ātman and the Four Kinds of Suffering in Early Buddhism," *Electronic Journal of Vedic Studies*. 12, 2: pp. 70-84.

SUMMARY

A Study on the Four Sufferings in the Pāli Canon

Ryūken NAWA

In this paper, I primarily report on the following three points: firstly, I developed a list of instances in the Pāli canon in which the content of the first noble truth of suffering (*dukkha- ariyasacca-*) is mentioned explicitly as birth (*jāti-*), old age (*jarā-*), and other elements. I consider the variant readings of the four editions (i.e., the Burmese, Siamese, Sinhalese, and Pali Text Society's editions), along with insights from commentaries and sub-commentaries.

Secondly, based on the list, I examined the presence or absence of “(a)pi” in the context of the first noble truth. The study reveals that “pi” is consistently placed in all three (or four) of the initial sufferings and the suffering of not getting what one wants. On the other hand, only the Burmese and Siamese editions include “pi” in the two sufferings: union with what is displeasing and separation from what is pleasing. In those cases, the Sinhalese and Pali Text Society's editions lack the two sufferings in the texts. Some variant readings have “pi” in the context of the five aggregates of clinging (*pañc'-upādānakkhandha-*) suffering. However, since it is a concise summary (*sāṅkhepa-*) of the sufferings from birth to not getting what one wants, it is preferable not to include “pi” in the context of the five aggregates of clinging.

Thirdly, concerning the content of suffering listed in the first noble truth, I organized the relationship between the variant readings of the four editions, explanation of commentaries, and sub-commentaries. I also made suggestions for preferred readings whenever possible. Additionally, it was observed that the readings in Be and Se tend to align with the content of the Theravāda tradition such as *Visuddhimagga*.

	四苦	怨憎会苦	愛別離苦
(ex. 1) Vin (vol. 1, p. 10)	jāti pi dukkhā, jarā pi dukkhā, vyādhi pi dukkho, maranam pi dukkham	appiyehi sampayogo dukkho	piyehi vippayogo dukkho
(ex. 2) DN 22 (vol. 2, p. 305. 各苦 の定義文あり)	jāti pi dukkhā, jarā pi dukkhā, [1] maranam pi dukkham, sokaparidevadukkhadomanassupāyāsā pi dukkhā [1] 備考欄参照。	Ee, Ce: 欠 [2] Be, Se: appiyehi pi sampayogo dukkho [2] 備考欄参照。	Ee, Ce: 欠 [2] Be, Se: piyehi pi vippayogo dukkho
(ex. 3) MN 9 (vol. 1, p. 48)	jāti pi dukkhā, jarā pi dukkhā, [1] maranam pi dukkham, sokaparidevadukkhadomanassupāyāsā pi dukkhā [1] Ee, Ce: add. byādhi pi dukkhā. 備考欄参照。	Ee, Ce: 欠 Be, Se: appiyehi sampayogo [2] dukkho [2] Be: add. pi.	Ee, Ce: 欠 Be, Se: piyehi vippayogo [3] dukkho [3] Be: add. pi.
(ex. 4) MN 10 (vol. 1, p. 62. Be, Se のみ各苦の定義文あり)	Ee, Ce: 欠 [1] Be, Se: jāti pi dukkhā, jarā pi dukkhā, maranam pi dukkham, sokaparidevadukkhadomanassupāyāsā pi dukkhā [1] 備考欄参照。	Ee, Ce: 欠 [1] Be, Se: appiyehi sampayogo pi dukkho	Ee, Ce: 欠 [1] Be, Se: piyehi vippayogo pi dukkho
(ex. 5) MN 28 (vol. 1, p. 185)	jāti pi dukkhā, jarā pi dukkhā, maranam pi dukkham, sokaparidevadukkhadomanassupāyāsā pi dukkhā	欠	欠
(ex. 6) MN 141 (vol. 3, p. 249. 各苦 の定義文あり)	jāti pi dukkhā, jarā pi dukkhā, [1] maranam pi dukkham, sokaparidevadukkhadomanassupāyāsā pi dukkhā [1] 備考欄参照。	欠	欠
(ex. 7) SN 56.11 (vol. 5, p. 421)	jāti pi dukkhā, jarā pi dukkhā, vyādhi [1] pi dukkho, maranam pi dukkham [2] [1] 備考欄参照; [2] Ee add.: sokaparidevadukkhad omanassupāyāsā pi dukkhā. 備考欄参照。	appiyehi sampayogo dukkho	piyehi vippayogo dukkho
(ex. 8) AN 3.61 (vol. 1, pp. 176f.)	jāti pi dukkhā, jarā pi dukkhā, [1] maranam pi dukkham, sokaparidevadukkhadomanassupāyāsā pi dukkhā [1] Ee, Ce: add. vyādhi pi dukkhā.	Ee, Ce: 欠 Se: add. appiyehi sampayogo dukkho [2] [2] 備考欄参照。	Ee, Ce: 欠 Se: add. piyehi vippayogo dukkho [2]
(ex. 9) AN 6.63 (vol. 3, p. 416)	jāti pi dukkhā, jarā pi dukkhā, vyādhi pi dukkho, maranam pi dukkham, sokaparidevadukkhadomanas supāyāsā pi dukkhā	欠	欠
(ex. 10) Patis (vol. 1, p. 37. 各苦の 定義文あり)	jāti pi dukkhā, jarā pi dukkhā, maranam pi dukkham, sokaparidevadukkhadomanassupāyāsā pi dukkhā	appiyehi sampayogo dukkho	piyehi vippayogo dukkho
(ex. 11) Patis (vol. 2, p. 147)	jāti pi dukkhā, jarā pi dukkhā, byādhi pi dukkho, maranam pi dukkham	appiyehi sampayogo dukkho	piyehi vippayogo dukkho
(ex. 12) Vibh (p. 99. 各苦の定義文 あり)	jāti pi dukkhā, jarā pi dukkhā, maranam pi dukkham, sokaparidevadukkhadomanassupāyāsā pi dukkhā	appiyehi sampayogo dukkho	piyehi vippayogo dukkho
(参考) Vism (p. 498. 各苦の定義 文あり)	jāti pi dukkhā, jarā pi dukkhā, maranam pi dukkham, sokaparidevadukkhadomanassupāyāsā pi dukkhā	appiyehi sampayogo dukkho	piyehi vippayogo dukkho

求不得苦	五蘊盛苦	備考
yam p' iccham na labhati tam pi dukkham	saṃkhittena pañc'-upādāna-kkhandhā [1] dukkhā [1] Ee: add. pi.	註釈 (Sp vol. 5, p. 965) は四諦への言及を欠く。
yam p' iccham na labhati tam pi dukkham	saṃkhittena pañc'-upādāna-kkhandhā [3] dukkhā [3] Ce: add. pi: Ee, n.4: "S ^d B ^m pi dukkhā; S ^a Col K omit pi"	[1] Ee: add. "[vyādhi pi dukkhā]." Ee, p. 305 n. 2: "B ^m K omit. It is also omitted in the questions below, and in M. iii. 249. Perhaps inserted here, by mistake, from Dhammacakkappavattana Sutta (S. v. 421)"; [2] Ee, p. 305, n. 3 "B ^m adds apiyehi sampayogo dukkho, piyehi vippayogo dukkho (= S. v. 421). K adds appiyahi (sic) sampayogo pi dukkho, piyehi vippayogo pi dukkho." Be, Seのみ怨憎会苦、愛別離苦の定義文を含む。註釈は四諦の詳細についてVismの参照を促す (Sv vol. 3, p. 797)。ただしSv自身が行う各苦の解説では (vol. 3, pp. 797-799), 怨憎会苦、愛別離苦のみ説明されない。
yam p' iccham na labhati tam pi dukkham	saṃkhittena pañc'-upādāna-kkhandhā dukkhā	[1] Ee, vol. 1, p. 531, l. -8: "byādhi pi dukkhā wanting in M, at p. 185, l. 4 in AM, at sutta 141 in A at least, likewise at DN. 22 according to Burmese authority; it is added at SN. LV.11, Vin. i, p. 10; in all the other passages referring to jāti, jarā, maraṇāṃ, the MSS. are generally consistent in either adding or omitting byādhi." 註釈は四諦の詳細について、Vismの参照を促す (Ps vol. 1, p. 215)。
Ee, Ce: 欠 [1] Be, Se: yam p' iccham na labhati tam pi dukkham	Ee, Ce: 欠 [1] Be, Se: saṃkhittena pañc'-upādāna-kkhandhā dukkhā.	[1] Ee, Ceは"idaṃ dukkham"などと四諦の短い説明文を提示するのみ。Be, Seはそれに加えて左記および各苦の定義文をも提示する。註釈は四諦の詳細についてVismの参照を促す (Ps vol. 1, p. 300)。
yampiccham na labhati tampi dukkham	saṃkhittena pañcupādāna-kkhandhā dukkhā.	註釈は四諦の詳細についてVismの参照を促す (Ps vol. 2, p. 219)。
yam p' iccham na labhati tam pi dukkham	saṃkhittena pañc'-upādāna-kkhandhā dukkhā	[1] 本経の脚注では異読情報は示されないが、ex. 3に対する脚注 (上記 ex. 3に対する備考欄に引用) によれば、一部の写本ではbyādhi pi dukkhāが含まれる。なお註釈 (Ps vol. 5, p. 65) は、四諦の詳細についてVismに説明を譲っている。
yam p' iccham na labhati tam pi dukkham	saṃkhittena pañc'-upādāna-kkhandhā [2] dukkhā. [2] Ee: add. pi; Ee, n. 4: "in B ¹⁻² only."	[1] 註釈 (Spk, vol. 3, p. 297) は四諦の詳細をVismに譲るが、Vismに病苦の説明は存在しない。[2] Ee n. 2: "S ¹⁻³ B ² omit soka".
yam p' iccham na labhati tam pi dukkham	saṃkhittena pañc'-upādāna-kkhandhā dukkhā	[2] Beは丸括弧つきで "(appiyehi sampayogo, piyehi vippayogo dukkho)" を挿入; 註釈は四諦の詳細についてVismの参照を促す (Mp vol. 2, p. 281)。
yam p' iccham na labhati tam pi dukkham	saṃkhittena pañc'-upādāna-kkhandhā [1] dukkhā [1] Ee: add. pi.	
yam p' iccham na labhati tam pi dukkham	saṃkhittena pañc'-upādāna-kkhandhā [1] dukkhā [1] Ee: add. pi.	ゴータマ仏による初転法輪記事 (ex. 1, 7) の引用。
yam p' iccham na labhati tam pi dukkham	saṃkhittena pañc'-upādāna-kkhandhā [1] dukkhā [1] Ee: add. pi.	
yam p' iccham na labhati tam pi dukkham	saṃkhittena pañc'-upādāna-kkhandhā [1] dukkhā [1] Se: add. pi.	

